

---

# 世界を越えし男と数の子たち

ココノエ・ヴァーミリオン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界を越えし男と数の子たち

### 【Nコード】

N8263Z

### 【作者名】

ココノエ・ヴァーミリオン

### 【あらすじ】

俺はこの日、掛け替えの無い奴らに出会った。

俺は車に跳ねられて死んだと思ったら、なんかよく分からんが別世界に行ってしまったみたいだ。

気が付けば、マッドな科学者や12人の姉妹と暮らしていたり、組織にケンカ売って犯罪者になっちゃったり。平凡な日々を送っていたり

そして――俺は戦う。ナンバーズ達を、世界を守るために。

## プロローグ（前書き）

ココノエです。

初投稿なのでうまく出来ているか分かりませんが、頑張っ  
て面白くものを書いて行こうと思います。

## プロローグ

夜の街を歩いている上下黒い服を着て赤いジャケットを着た男がいた。

秋の冷たい風が男に強く当たっている。

???「秋

とはいえ結構寒くなってきたな。」独りそう呟きながら、上着のポケットに手を入れた。

男がポケットから取り出したのは、赤い、宝石のような石だった。

???「あれからもう半年か…」

赤い石を見て、彼は半年前の事を思い出していた。

半年前、彼：五十嵐優斗の家族は、居眠り運転による信号無視の車との衝突事故で亡くしてしまっているのだった。

彼の持っている赤い石は、彼の妹の沙耶に貰った物だった。

ユウト「そういやあ、明日はサヤの誕生日だったな。墓参りに行かないと、父さんと母さんの分も何かお供え物でも持って行ってやるかな。」そう考えながら、青になった信号を渡った。信号の真ん中あたりで、同じ信号を渡っていた人達が自分の右側を見て何かを叫んでいる。

右側を見ると、大きいトラックが自分に向かって突っ込んで来ているのを見て思わず優斗は叫んだ。

ユウト「ちょ！マジかよオイ！」

トラックはもうすぐ目の前まで来ている。死ぬ、これは逃げようが無い。しかし、彼は不思議と落ち着いていた。

ユウト（ああ、もう死ぬからかな、時間がゆっくりに感じられる。サヤ、もうすぐ俺もそっちに行くみたいだ。お前の誕生日、そっちで祝ってやるよ。って、プレゼント買ってねーから何もあげられねえな、悪い。）

そうして彼は目を閉じた。

彼は気がついていなかった。上着のポケットの中の赤い石が強烈な光を放っていた事を。そして、その光は彼を飲み込み、彼は姿を消した。

車は、何にも当たる事無く通り過ぎた。後に残っていたのは、車が当たる直前、光に飲まれて消えた優斗の事で困惑している人達だけだった。

## プロローグ（後書き）

光に飲まれた彼はどうなったのか。次回はナンバーズ達との出会い。

ユウト「異世界トリップとか、とんでもない事になってるな、

俺。」

出会いはいつも突然っていうけどこれは特殊過ぎる（前書き）

今回、ナンバーズとマッドな科学者と出会います。

出会いはいつも突然っていうけどこれは特殊過ぎる

ユウト「あれ？生きてる……」優斗は呆然と突っ立っていた。自分は車に衝突したはず。それなのに体には何ひとつ怪我も無く、車に衝突したときに襲ってくる強烈な痛みも無い。

優斗が目を開けた先に映ったのは、五体満足の体と、どこかの建物の中であろうか、見知らぬ通路だった。

ユウト（どこだ？此処。天国って訳じゃ無さそうだが）

優斗は上着のポケットに手を入れ、赤い石を取り出した。

ユウト（これが無事って事は、車に轢かれてはいないって事か。轢かれていたら、これも粉々になっているだろうからな）

それにしても、何故自分は無事なのか、ここはいつたいどこなのか疑問は尽きる事はなかった。

ユウト「ここに突っ立っていても仕方ない。とりあえず、この建物の外に出てみるか」

優斗は、見知らぬ通路を歩き始めた。

ユウト「そういえばこの建物、誰か人が居たりするのか？もし居たら俺、侵入者だとか言われたりするんかな？」

冗談半分でそう呟いた。その時、警報のような激しい音が突然鳴りだした。

ユウト「な、なんだあ！？」

警報の音に驚く優斗。

ユウト「これ…俺のせいか？だとするとまずいよなあ……」

そう言つと優斗は走り出した。この警報の原因が自分なら、捕まった後、警察にでも突き出されて逮捕、という事になるかもしれない。

持っていた疑問を後回しにして、優斗は通路を駆け抜けた。

ユウト「ったく、出口は何処だよ」

独りそう言つと、優斗は通路の壁に寄りかかった。

すると、左腕が何かにいきなり掴まれた感じがした。

左腕の方を見るとそこには、信じられない事が起きていた。なんと、壁の中から一人の女の子が現れたのだ。

???「つつかまゝえた」

可愛らしい声と共に、優斗の体を拘束した。

普段なら女の子と密着すれば、男としては少しは興奮したり恥ずかしいと思つたりするだろうが、今の優斗にはそれどころではなかった。

???「セイン！侵入者は捕まえたか！」

走つて来た通路の奥の方から別の女の子……ではなく女性がやつて来た。

セイン「うん、捕まえたよトーレ姉」

セインという名の女の子が、通路から来た女性――トーレにそう答えた。

そして、トーレは優斗の所に来て、質問して来た。

トーレ「貴様……何者だ？管理局の魔導師か？」

ユウト「何者だあ？相手が何者か尋ねるときはまず自分からじやねーのか？それに、管理局とか魔導師って何だよ？」

それもそうか、と言うようにトーレは名乗った。

トーレ「私はNo.3、トーレだ。お前の名は何だ？何故、ここに侵入した？（管理局を知らない？この男はいつたい……）」

ユウト「ああ、俺の名は優斗、五十嵐優斗だ。ここには、気が付いたらいたって感じたな。つか、ここ何処だよ。」

あのやり取りの後、俺はトーレとセインにとある一室に案内……と言つか連れて行かれた。トーレに「持っているものを全て渡せ」と言われたので、持っているもの……携帯と財布、あと赤い石を渡し

た。赤い石を見たトーレが何か呟いたようだがよく聞こえなかった。トーレが部屋から出て行った後、今の状況を整理していると、扉の開く音と共に、二人の人が入って来た。

片方は紫色の髪に白い白衣を着た男、もう一人は薄い紫っぽい色の髪をした女性だ。

???「すまない、待たせてしまったね。私の名はジェイル・スカリエッティ、隣に居るのはウーノ、私の秘書だ」

ウーノ「はじめまして、ウーノです」

ユウト「あ、五十嵐優斗です。」

挨拶を交わした後スカリエッティは、赤い石を取り出して言った。

スカリエッティ「君の持ち物を調べさせてもらったよ」

ユウト「それは、さっきトーレに渡した石」

スカリエッティ「これは、時空移動型のロストロギアのような。」

時空移動は映画とかで有ったから何となく分かるが、ロストロギアっていうのは知らないな。

ユウト「なあ、その…ロストロギアっていうのはどういう物なんだ？時空移動ってのは何となく分かるけど」

スカリエッティからロストロギアについて聞いた。何でも、世界は一つだけでなく、星の数程あるらしい。そしてロストロギアとは、進化し過ぎた世界の危険な技術の遺産なんだとか。しかも、物によつては世界を滅ぼす程の力を持った物や、俺の持っていたような時空移動型の物もあるんだとか。

ユウト（何でそんなものが俺の居た世界にあったんだ？）

スカリエッティ「さて、これらの事から君は次元漂流者……世界規模の迷子になってしまった訳だが……」

ユウト「ま、迷子……、って、まだ何かあるのか？」

スカリエッティが優斗の目を見ながら言う。

スカリエッティ「ああ、このロストロギアの魔力が切れていたからね、魔力を注入してみたが、全く反応しなかった」

ユウト「つまり、もうそれは使えない…そう言う事か？」

優斗は嫌な予感を覚えつつ、尋ねてみた。

スカリエッティ「そうだ。この石での時空移動は出来ない。仮に出来たとしても、元いた世界に帰れる可能性はゼロに等しい」

……ここまで言われたら誰でも分かる。

スカリエッティ「…君はもう、元の世界には帰れないという事だ」

出会いはいつも突然っていうけどこれは特殊過ぎる（後書き）

さて、これから優斗はどうなるのか！？ 次回、スカリエツティが優斗に言った提案とは？そして、まだ見ぬナンバーズとの邂逅。ユウト「改めて見ると、ナンバーズ達のあの格好…なんつつか…エロくねえ？」

何処の世界も組織の裏は真っ黒（前書き）

何か、半分位が説明になってしまった気がする。

## 何処の世界も組織の裏は真っ黒

帰れない。

それが意味する事は、二度と元の世界に帰る事は出来ない。

スカリエッティの言葉を聞いた優斗の反応は……

凄く軽かった。

ユウト「あー…まあ、いつか。」

優斗の余りにも軽い発言に、スカリエッティは思わずずっこけた。

スカリエッティ「ず、随分と軽くないかい？元の世界に帰れないと言うのに」

ユウト「ああ、どうせ帰れても家族もいなければ友人もいないし、元の世界に未練は無い。それに、ここに来る直前、車に跳ねられて死ぬ寸前だったんだ。多分、俺は車に跳ねられて死んだ事になっっているんじゃないか？」

優斗のその言葉を聞いたスカリエッティは少し考えた後、何を思いついたのか、ニヤリと笑みを浮かべて優斗に言った。

スカリエッティ「それならば優斗君……此処に住まないかい？」

優斗はスカリエッティのこの提案に思わず「……………は？」と言わんばかりの表情になってしまった。

スカリエッティの言った提案には、隣にいたウーノ達も驚いていた。

スカリエッティ「君は元の世界に帰れない以上、この世界で暮らすしかない。しかし、今の君には頼れる人もいなければ先立つ物もない。管理局の所に行けば、次元漂流者という事で保護して貰えるけ

ど、これはオススメ出来ないね」

「管理局ー、トーレも言っていた、貴様は管理局の魔導師か、と。ここで優斗は、先ほどから持っていた疑問を口にした。

ユウト「そっぴゃあ、さっきもトーレが言ってたけど、その…管理局ってのは何なんだ？何かの組織か？」

スカリエッティ「ああ、管理局というのは……………」

優斗はスカリエッティから管理局の事を聞いた。

管理局とは、時空管理局の事で、そこでは魔導師という魔法を使う者達が働いている。魔導師は、体の中にある「リンカーコア」という器官から生じる魔力を用いて魔法を使う。「リンカーコア」がなければ、魔法を使う事は出来ないとのこと。

そして、管理局についてだが…………表向きは、魔法というクリーンな力を用いて、次元世界の平和を守る正義の組織。

しかしその裏……………真実は、リンカーコアを持つ人は少ないため、管理局は万年人材不足である。そこで、魔導師の人数不足を補うために管理局が行っていることが、…人造魔導師の製造だった。スカリエッティに、映像で管理局の裏を見せてもらったが…映像の中身は『地獄』といえるものだった。

そこにあつたのは、

生態実験により、原型を留めていない『何か』、泣き叫ぶ子供や女性、男性、動物達。

気にもせずに実験を繰り返す研究員達。

ユウト「な…何なんだよ！これは…！」

余りの残酷さに、声を荒げる優斗。

スカリエッティ「…これが、管理局の実態だ」

そう言うと、スカリエッティは優斗の方を見た。すると、優斗の体が震えている。そして、優斗は叫んだ。

ユウト「ざけんじゃねえよ！！何が正義だ！何が魔法だ！、」

優斗の心からの怒りと叫びに、優斗の後ろにいたトーレも思わず後ずさりしてしまった。

ユウト「何が世界を『管理』するだ！自分の世界すらともに『管理』出来てねえ癖に！それに…人の命を何だと思ってるんだよ！」

少しして、落ち着いた優斗は

ユウト「スカリエッティ、此处に住まわせてくれ。そして、アンタ達の計画に協力する。でも、唯の協力じゃねえ」

ユウト「管理局は……ぶっ潰す」

その言葉を聞いたスカリエッティは、

スカリエッティ「分かった。歓迎するよ、優斗君」

あの後、俺はセインに部屋に案内された。その途中で改めて自己紹介した。

No.6 って言ってたけど、No. って何？  
そのうち聞けばいいか。

暫く案内された部屋でゴロゴロしてたらスカリエッティが来て、夕食という事で食堂に案内された。そこで他のナンバーズ達に紹介するんだと。道中で聞いたらNo. 1 なのは、ウーノ達ナンバーズの製造番号の事で、スカリエッティの作品であり娘、そして『戦闘機人』だと言っていた。

あれこれ話しているうちに食堂に着いたので、中に入った。

食堂には自分とスカリエッティを除いた他のメンバーが全員揃っていた。

最初は驚きやら何やらで余裕が無かったが、落ち着いて周りを見ると、…なんつうか…あの全身タイツみたいなスーツ姿…エロくねえ？目のやり場に困るんだけど。見てる方が恥ずかしいんだけど！？

そんな事を思いつつ、俺は食堂に居るメンバーと自己紹介した。

ユウト「五十嵐優斗だ。今日から此処に住む事になった。よろしくな」

そう言つと、向こうも自己紹介をした。

濃いピンク色の髪を後ろでまとめている女の子が、ウェンディ。

赤髪の女の子が、ノーヴェ

茶色のロングヘアを、黄色いリボンで後ろで縛っている女の子が、ディエチ。

栗色の髪を両脇で結び、眼鏡をかけてる女性が、クアットロ。  
そして……

チンク「チンクだ、よろしくな」

チンクと名乗った少女は、銀髪は腰の下まで伸びて、右目を黒の眼帯で隠した十代前半の少女だった。

……俺はその姿を見たとき驚いたよ。

チンクと……死んだ妹の沙耶が、

……あんなにも、似ていた事に……

## 何処の世界も組織の裏は真っ黒（後書き）

スカリエッティ達と暮らす事になった優斗。しかし、問題が発生した。その問題とは？

ユウト「見せてやるよ…、俺の料理の腕前を！」

お金があると、つい余計な物まで買ってしまったりする（前書き）

チンクとクアットロの口調、これで合ってたっけ？

お金があると、つい余計な物まで買ってしまったりする

俺達はお互いに自己紹介（他にもN.O.2のドゥーエがいるが、今は任務中でいないとの事）した後、みんなで夕食を食べる事になった。

しかし……

ユウト「おい…、何だ、これ？」

スカリエッティ「何…って、夕食だが？」

夕食といえば、本来は手間暇かけて作った温かいおかずが沢山並んでいるだろう。

ところが、此処に並んでいたのは……

ユウト「俺の目がおかしくなければ、クッキーとかサプリメントにしか見えないんだけど」

スカリエッティ「君の目は正常だよ」

そう、此処に並んでいたのは、優斗の居た地球では、バランス栄養食品と呼ばれていた物だった。

ユウト「なあ、ウェンディ、まさかとは思っけどよ…、今までも『これ』だったとか…言わねえよな？」

ウェンディ「ん？今までずっと『これ』だったっスよ？」

その言葉を聞いた優斗は、部屋の隅に置いてある冷蔵庫に向かった。ノーヴェが「いらねえなら貰っちゃまうぞ」と言っていたが、優斗の頭の中はそれどころではなかった。

冷蔵庫のドアを開け、中身を見た優斗は絶句した。  
冷蔵庫の中身は、

バランス栄養食品でギッシリ詰まっていた。

優斗はドアを閉め、机に向かった。そして……

ユウト「テメエら！！馬鹿か！！」

優斗の叫びに、全員の動きが止まった。

ノーヴェ「な…何だよ！いきなり！？」

ユウト「何だじゃねえよ！！あの栄養食品の数こそ何だ！毎日あんなもん食ってられるか！」

クアットロ「あら、好き嫌いは駄目よ、優ちゃん」

ユウト「好き嫌いとか以前に体壊すわ！つか何だ！優ちゃんってのは！？」

クアットロ「優斗だから『優ちゃん』よ」

ユウト「…それより、何で食材の一つや2つ無いんだ」

スカリエッティ「そ、それは…誰も料理が出来ないから…」

その言葉を聞いた優斗は決心した。

ユウト「分かった。スカリエッティ、明日食材を買いに行ってくるから金をくれないか」

スカリエッティ「あ、ああ、構わないよ。でも君はこの世界をよく知らないだろう？案内役に私の娘を一人連れて行きなさい」

チンク「なら、私が行こう」

スカリエッティ「それならチンク、頼んだよ」

チンクは、「分かりました、ドクター」と言った後、此方の方を向いた。

チンク「そう言うわけで、明日は私が案内しよう」

ユウト「あ…ああ、それじゃあ、頼むわ。（やっぱりよく似てるんだよなあ…）」

――翌日――

俺は朝飯を我慢して『あの』栄養食品で済ませた後、スカリエッティの所に向かった。

スカリエッティ「やあ、おはよう、優斗君」

ユウト「ああ、おはようさん。さっそくだが、食材、買いに行つて

くるから金をくれ」

そう言うと、スカリエッティは優斗に大量のお札を渡した。

スカリエッティ「それだけあれば足りるだろう？ チンクはもう準備して待ってるよ」

ユウト「分かった。じゃあ行ってくる」

アジトの入り口で待っていたチンクと合流し、街に向かった。ちなみに、チンクは昨日の全身タイツ姿では無く、白いシャツにGパンを穿いていた。聞くと、街への偵察用にみんな普通の服は持っているとの事。

――首都、クラナガンー

ユウト「しつかしなあく、こついつのを見ると、改めて此処は地球じゃねえんだなって思うな」

優斗が周りを見渡すと、空間に浮かぶモニターや見たことの無い文字が目にはいる。

チンク「？、地球はどんな所何だ？」

ユウト「地球も科学は発展してるけど、此処までじゃないな。それに、文字が違う」

チンク「そうか。ちなみに、あれは魔法だぞ」

チンクが空間に浮かぶモニターを指差して言う。

ユウト「は？あれが？、どう見ても科学じゃねえか。まさか、あの

超科学がこの世界の魔法ってか？」

魔法ってのはもっと、ファンタジーなもんかと思ってたのに。

ユウトがそう呟いているうちに、二人は大型スーパーに到着した。

食材を買い物籠に入れながら歩いていると、チンクが話しかけてきた。

チンク「そういえば優斗、お前は料理出来るのか？」

ユウト「ん？ああ、これでも料理は得意だぜ。何か食べたいのがあったら作ってやるけど？」

チンクは少し困ったように言った。

チンク「うむ…料理を食べたことが無いからな…」

自分は何が食べたいよく分からない。ふと、商品のある棚を見た、そこで目に映ったのは、

プリンだった。

チンク「なあ、プリンは作れるか？」

チンクはプリンの方を見ながら言った。

ユウト「プリン？いいぜ。すると…卵と牛乳がいるな…」

そう言い、牛乳と卵を籠に入れた。

チンクはこの様子を見て、何気なく優斗に聞いた。

チンク「優斗はこの世界に来る前は、よく家族に料理を作っていたのか？」

優斗はチンクの何気ない質問に一瞬表情を変えた。

ユウト「そうだな。母さんが料理出来なかったから、よく俺が料理を作ってたな。父さんは仕事で家に帰るのが遅かったし、妹のサヤは、病弱だったから、俺が作るしか無かったんだけど」

チンク「そうだったのか。しかし、優斗がいきなり居なくなっって、家族は心配しているのではないか？」

ユウト「家族は…半年前に死んだよ。事故にあっってな…」

チンクは優斗に悪い事聞いたと思い、すぐに謝った。

チンク「！！、済まない、悪い事を聞いた」

ユウト「気にすんな。さて、会計して帰るぞ」

チンク「あ…ああ」

—————帰り道—————

道を歩いている途中、チンクが優斗に謝るように言った。

チンク「優斗、さっきは、悪い事を聞いて済まなかった」  
これに対して優斗は

ユウト「さっきも言ったろ？気にするなっって」  
その言葉を聞いたチンク、それでも済まなそうに優斗の顔を見た。  
その顔は、

とても悲しげだった。

チンク「優斗…お前は気にするな、と言っていたが、家族の事を話しているとき、悲しそうな目をしていたぞ。

……特に、妹の事を話していた時は」

チンクが言った後、優斗はチンクを見据えて言った。

ユウト「実はな…、最初、お前を見た時、妹…サヤを思い出したんだよ」

チンク「妹を…？」

チンクは少し驚いた表情になった。

ユウト「ああ、なんつつか……、よく似てるんだよ…。特に、雰囲気とかがな…」

チンク「そうか…」

ユウト「そうだな…。帰ったら、俺の家族の事、俺の事を聞かせてやるよ」

チンク「！？、優斗の事を…」

ユウト「ああ、そんじゃあ、アジトに帰るぞ」

そして、二人は道を再び歩き出した。

お金があると、つい余計な物まで買ってしまったりする（後書き）

アジトに戻った優斗とチンク、優斗の過去とは一体？

ユウト「そっいえば俺、今回料理するとか言って結局してねえや」

……次回、優斗が料理の腕前を発揮します。

学校で教師が「いじめはよくない」とか言ってるけど実際はいじめの現場を見て

この話を書いてたら、原作のナンバーズ達も一つの家族みたいな感じだよな、と思った。

つか、話が凄い事になってるかもしれない。

学校で教師が「いじめはよくない」とか言ってるけど実際はいじめの現場を見て

アジトに帰った俺達は、さっそく昼食の準備を始めた。

帰った時には十一時くらいになっていた。とりあえず俺は、米を炊いた後、野菜炒めや卵焼き作る事にした。作っている最中に、セインとウエンディがやって来て

セイン「へえ、優斗って料理出来たんだ？」

ウエンディ「美味しそうッスね、何を作ってるんスか？」

と、言ってきたので、暇なら食器を出してくれ、と言っておいた。

一時間後、米も炊けたので、昼食を食べる事にした。ウーノとスカリエッティも栄養食品以外の食事は初めてとの事で、食堂に集まっていた。普段は研究室で食事しているとウーノが言っていた。

ユウト「うーし、出来たぜ」

ディエチ「これ…優斗が作ったの？」

ノーヴェ「何だ、美味そうじゃねえか」

みんな席に着き、手前に置かれてる箸を見る。

トーレ「これは何だ？」

ユウト「箸だ」

クアットロ「どうやって使うのかしらあ？」

ユウト「それはだな……」

優斗が、箸の使い方をナンバーズに教える。

数分の箸講座を終えて、ナンバーズの皆は箸が使えるようになった。

ノーヴェ「よし。じゃあ早速」

ユウト「ハイ、ストープ！ちょっと待った！」

ノーヴェ「何だよ！？」

優斗がノーヴェを制す。

ユウト「食事を始める前に、『いただきます』は？」

ノーヴェ「何だよ、ソレ？」

ユウト「まあ、食材になってくれた命に対する感謝の気持ちみたいなものだ」

ディエチ「そうなの？」

ユウト「そうなの。ちなみに食べ終わった時は『ごちそうさま』だ」

そう言つと、トーレはなるほどと言い

トーレ「それなら、我々も優斗の言つ通りにするか」

ユウト「それじゃあ……」

全員『いただきます』

—————

俺の作った料理はとても好評だった。

「フーカノーヴェ、オメーどんだけ食ったよ。ご飯何杯かわりした？軽く五杯以上食ってたよな？」

そして、後片付けの最中

ユウト「それじゃあチンク、後で俺の部屋に来てくれ、そこで話すから」

チンク「？、ああ、分かった。…しかし、いいのか？家族の事、話すのが辛かったら、話さなくても良いんだぞ」

その時、横から声が掛かった

セイン「？、ねえねえ、何の話？」

ディエチ「優斗の家族がどうこうって聞こえたけど…」

ウエンディ「あ、あたしも聞きたいっス」

スカリエツティ「そういえば…君は昨日、家族がいないと言っていたね」

まだ食堂に残っていた四人が二人の話を聞いていた。

チンク「優斗……」

優斗は四人の方を向いた。

ユウト「…そうだな。いいぜ、俺の家族の事、お前たちにも聞かせてやるよ」

そう言うと六人は机の椅子に座った。

ユウト「それじゃあ話とするか、俺の事、俺の家族の事を……………」

—————

俺の家は元々三人家族だった。

母さんは専業主婦で、父さんは普通の会社勤めのサラリーマンだった。

俺の家は別段金持ちでも貧乏でも無かった。

そして、俺が3歳の時、妹のサヤが生まれた。

サヤは生まれつき体が弱かった。髪は白くて目は赤い…色素欠乏症…アルビノだったせいかは分からねえけど。

まあ、それでもあの頃は家族四人、とても幸せだった。

俺が九歳になった時、サヤは六歳で小学校に入学した。

俺はその頃は友人もいたし、結構楽しかった。

でも、それも余り長くは続かなかった。

サヤはアルビノで、周りと髪や目の色が違った。

そのせいか、サヤはクラスで孤立していた。一人だけ、周りと違うから気味悪く思われて居たんだろう。

サヤはよく苛められていた、　　気持ち悪い　　近寄るな　　等と言われたり、石を投げつけられたりされていた。助ける度に、本人は大丈夫と言っていたが、とてもそうは思えなかった。

それからある日、事件が起こった。

サヤを苛めていた集団の一人が投げた石が

サヤの右目に強く当たった

俺はその瞬間を見た

サヤの右目から

赤い血が出たのを

俺は怒りがこみ上げ、サヤを苛めていた集団を半殺しにした。俺はサヤを背負って近くの病院に行った。病院で検査の結果、医者に言われた事は

サヤの右目は治らない

俺はその言葉を聞いて、とても悔しかった。医者には八つ当たりもした。

数日後、サヤは病院から退院した。

右目に眼帯を付けて

俺は学校で孤立した。人を半殺しにしたことで、俺は恐れられた。仲の良かった友人も離れていった。

サヤはあの事があった後も学校に通っていた。

サヤはより苛められるようになった。

白い髪に赤い目、それに眼帯。

その姿を見た周りの人は、サヤにこんな事を言った

――『化け物』――

と

そう言われた日の夜、サヤは俺に泣きついてきた

その日、俺は決めた。サヤを苛める奴を、サヤを泣かせる奴は絶対に許さない。

その日から、学校で俺も苛められるようになった。

# 『化け物の兄』

として……

俺はそう言った奴らを、男も女も関係なく、半殺しにした。  
「サヤを悪く言う奴らは許さねえ」と

そう言う俺の姿を見て、誰かがこう言った。

「……『死神』……と。」

サヤは学校に行かなくなった。俺は中学へ進学した。

中学でも孤立し、恐れられていた。俺の事を何処からか聞きつけた奴らが、サヤの事で悪く言ってきたりした。それでよくケンカになった。

俺は中学を卒業して高校に入った。

成績は良かったから、入るのは余り問題じゃ無かった。

中学の他の奴らは誰もいなかった。

中学校や小学校のときみたいに友人は居ない…と言うか作っていない。

高校生活は平和だった。

俺やサヤの事を悪く言ってくる奴らが居なかったからな。

俺の誕生日には、サヤが近くにある河原で拾ったと言って、赤い…宝石のような石をくれた。

だが……数日後、

両親とサヤが死んだ。

原因は居眠り運転をしていた車に跳ねられたとのこと。

俺は家に居たから無事だったが、サヤは、両親は、この世から居なくなつた。

それから半年後、俺は街中で車に跳ねられて死んだ。そう思ったらこのアジトにいた。そして

お前たちに出会った

――――

ユウト「ーとまあ、これが俺の家族とか、過去のことだ」

そう言い、優斗は話終えた。周りを見ると、何人が泣いていた。

ウェンディ「サヤが…サヤがかわいそうっス…」

ディエチ「うん…」

セイン「優斗…大変だったんだな…」

ユウト「……そーだな……、俺は最初、チンクを見たとき、チンクとサヤが被って見えた。似ていたからな……」

そう言い、優斗は時計を見た。

優斗「…と、そろそろ夕食の準備をしないとな」

今まで

黙っていたスカリエッティは口の開いて、優斗に聞いた

スカリエッティ「君は…寂しく無いかい？」

ユウト「寂しく無い…って言えば嘘になるな…」

優斗は続けて言う。

ユウト「さつき、みんなで昼飯食ってた時も、家族が生きてた時の事を思い出してた。」

五人は無言で聞いている。

ユウト「家族と一緒に食ってた飯は美味かった。ああ、さつき食った飯も美味かったぞ。…って、自分で作ったんだけどな。でも、何かが違うんだよ…」

多分、一緒に住んでいるとは言え、家族じゃ無いからかな」

優斗の言葉を聞いて、スカリエッティは椅子から立ち上がった。

スカリエッティ「優斗君。私は君のことを家族同然だと思ってるよ」

ユウト「え…!？」

スカリエッティに続けてセイン達と言う。

セイン「あたしも優斗の事、家族だと思ってるよ」

ウェンディ「そうっスよ。一緒にご飯食べたったりしたんスから」

ディエチ「優斗は違うの？」

四人の言った事に優斗は

ユウト「いや…、そうか、そうだったな。此処に住むになった時から、俺は、俺達はもう

――『家族』なんだよな――」

スカリエッティ「じゃあ、改めて言おう。――ようこそ、歓迎するよ、優斗君」

ユウト「――ああ」

――――――――――

こうして、俺は改めてスカリエッティやナンバーズの一員になった。

そして夕食を食べた後、チンクが俺に話しかけてきた。

チンク「優斗、家族と食べた料理はどうだ？」

ユウト「どうって…、俺が作ったんだけどな……」

――美味かったぜ、さっきよりも」

チンク「…そうか、なあ、また今度、プリン、作ってくれないか？。

お前の作ったプリン、美味かったからな……」

ユウト「了解」

ユウト「チンク」

チンク「何だ？」

ユウト「家族って……いいよな……」

チンク「そうだな……」

学校で教師が「いじめはよくない」とか言ってるけど実際はいじめの現場を見て

さて、次回からは今までと違って変わって平凡な日常になりまーす。

次回、探検、発見、ミッドチルダの都市クラナガン。

ユウト「これは…良いものだ…」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8263z/>

---

世界を越えし男と数の子たち

2011年12月28日20時51分発行